

氏名	府川 晃子 (ふかわ あきこ)	
学位の種類	博士(看護学)	
学位授与番号	甲 第 8 号	
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 7 日	
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項該当	
学位論文題名	分子標的薬を内服する肺がん高齢患者の QOL を保つための自己管理支援プログラムの開発に関する研究 (Development of Self-Management Support Program for Elderly Patients with Lung Cancer who are Receiving Molecularly Targeted Therapy with Oral Agents)	
論文審査委員	(主) 教授	赤澤 千春
	教授	鈴木 久美
	教授	山崎 歩

学位論文内容の要旨

《緒言》

昨今では、肺がん治療の分野における分子標的薬治療の進歩が目覚ましく、次々と新たな薬剤が開発され、多くの患者が分子標的薬による治療を受けている。分子標的薬は、がんの発生や増殖、浸潤や転移に関わる特定の分子を標的とした治療薬であり、対象となる遺伝子変異を持った肺がん患者に対して、生存期間の有意な延長だけでなく、咳嗽や呼吸困難、疼痛といった症状の緩和にもつながる (Bezjak et al., 2006)。さらに、肺がんは人口の高齢化ともなって罹患率が高くなっており、罹患年齢のピークは 80 代前半である(国立がん研究センター, 2015)。分子標的薬の有害事象は間質性肺炎や皮疹、下痢などの特徴的で複雑なものであり、肺がん患者に対する分子標的薬の内服治療に関する実態調査 (林ら, 2013)では、薬の減量や中止に影響する要因のひとつとして「高齢者であること」が挙げられている。肺がん高齢患者では有害事象のコントロールが難しく全身状態が悪化しやすいことが、薬剤の変更や治療の中止につながることを示唆されている。さらに、近年増加している分子標的薬の内服による治療は、外来通院で行われることが多く、患者は治療の有害事象や病気の進行に対する不安などの多岐にわたる問題に、自分自身で対処し続けなければならない。高齢がん患者が医療者や家族などから適切に支援を受けながら、より良い療養生活を送ることができるよう、高齢者の特徴に合った自己管理への支援が必要である。

しかし現状では、外来で経口抗がん剤や経口分子標的薬の内服による治療を受けている患者に対して行われている援助は、有害事象への対処方法の指導や情報提供が中心となっている(Komatsu, Yagasaki, & Yoshimura, 2014)。先行研究からは、抗がん剤の内服による治療を受けている患者への介入や教育プログラム(Boucher, Lucca, Hooper, Pedulla, & Berry, 2015; Kav et al., 2010; Schneider, Adams, & Gosselin, 2014)も散見されるが、これらの介入は主に患者のアドヒアランスを高めることを目的としており、介入方法は患者の知識を向上させることが中心となっているため、高齢患者に適したものとは言えない。

そこで本研究では、患者の QOL を維持・向上することを目的とした、外来で分子標的薬内服治療を受ける肺がん高齢患者の自己管理を支援するプログラムの開発を目指すこととした。

《目的》

本研究の目的は、外来で分子標的薬の内服による治療を受ける肺がん高齢患者の自己管理の過程を明らかにし、QOL を保つための自己管理を支援するプログラムを開発することである。

《方法》

本研究は 3 つの段階を踏んで実施した。各研究の目的および方法は以下のとおりである。

1. 化学療法を受ける高齢がん患者の QOL の実態や、QOL に関連する要因について明らかにするため、文献レビューを行った。
2. 外来で分子標的薬内服治療を受ける肺がん高齢患者の自己管理の過程を明らかにするため、半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析を行った。
3. 第一部の文献レビューと、第二部の質的研究の結果をもとに、外来で分子標的薬内服治療を受ける肺がん高齢患者の自己管理支援プログラム試案を作成し、専門性をもった看護師の意見をもとに洗練化した。

《結果および結論》

第一部の文献レビューでは、化学療法を受ける高齢がん患者の QOL の実態や、QOL に関連する要因について明らかにした。「older/elderly (高齢, 高齢者)」「cancer patient (がん患者)」「chemotherapy/anti-cancer agents (化学療法, 抗がん剤)」「QOL/quality of life (QOL, クオリティ・オブ・ライフ)」をキーワードとして文献を検索し、最終的に英語文献 19 件、日本語文献 7 件を分析対

象とした。化学療法を受ける高齢がん患者の QOL の実態として、高齢がん患者の QOL は成人患者と比較して差はない、あるいは看護師の介入によって成人患者よりも高い QOL を維持していたという結果がみられた。また、高齢がん患者の QOL には、さまざまな身体症状や併存疾患などが影響していた。患者は身体面だけでなく、心理・社会的側面にも幅広い支援を要している反面、高齢者ならではの強みも持っていることが明らかになった。患者が自分らしい生活を保てるよう、疾患や治療の影響を柔軟に受け入れられる高齢者ならではの強みを活かし、様々な支援を活用しながら自己管理を行えるよう支援していくことが、QOL の維持に重要であることが示された。

第二部では、外来で分子標的薬内服治療を受ける肺がん高齢患者の自己管理を支援するプログラムへの示唆を得るため、患者の自己管理の過程を明らかにした。外来で経口分子標的薬の内服による治療を受けている 65 歳以上 85 歳未満の肺がん高齢患者 17 名を対象に、半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析を行った。分析の結果、19 の概念が生成され、6 つのカテゴリーに類型化された。肺がん高齢患者は自己管理をするために、以下のプロセスをたどっていた。患者は告知を受け内服による分子標的治療が開始されると、【がんと共存の受け入れ】をし、同時に、【がんと関われない自分なりの生活のしかたの維持】を心がけていた。そして、がんと共存を受け入れ、自分なりの生活のしかたを維持しながら、【最後まで自分らしい生き方の再検討】を開始し、これに基づいて、【生活の中に治療を取り込む試行錯誤】と、【どこまで頑張って治療を続けるかの基準づくり】のサイクルが形作られて、治療効果と副作用を見定めたくえでの自分らしい生活の探索を行っていた。【周囲の人たちの助けを借りる】ことは、【がんと共存の受け入れ】や、【がんと関われない自分なりの生活のしかたの維持】、【生活の中に治療を取り込む試行錯誤】、【どこまで頑張って治療を続けるかの基準づくり】に影響を与え、それぞれを強化していた。この結果から、看護師は、患者がより良い生き方について考え、生活の質を高める方法を探索できるように援助することや、患者と医療者の間で治療の目的が共有できるように支援する必要があることが示唆された。

第三部では、第一部の文献レビュー、第二部の質的研究の結果をもとに、「分子標的薬を内服する肺がん高齢患者の QOL を保つための自己管理支援プログラム」試案を作成し、専門性をもった看護師の意見をもとに洗練化して、プログラムを開発した。プログラムの目標は、「外来で分子標的薬の内服による治療を受ける肺がん高齢患者が自己管理できるようになることにより、副作用や不安が軽減されソーシャルサポートが強化されて、QOL が維持・向上すること」とした。分子標的薬による治療の開始からの患者の自己管理の過程と、治療の副作用の出現時期や生活の変化を鑑みて、介入期間は治療導入の時期から治療開始 3 ヶ月目までとし、回数は 3 回とした。そして、看護師がプログラムを効果的に実施するための手引きとして、看護実践ガイドを作成した。作成したプログラムを洗練化するために、肺がん高齢患者や外来で化学療法を受ける患者のケアに精通した看護師 11 名を対象にフォーカスグループインタビューを行い、プログラムの改善点を明らかにした。インタビューの結果に基づいて、3 回目の介入を治療開始 2 ヶ月目に変更して、対象は入院で治療を開始してその後外来に移行した患者に限定し、プログラムの時期や対象を洗練した。また、理解しやすいようプログラムの構成要素の表現を修正し、①自分らしい生活・人生の支援、②適した方法での情報提供、③生活の振り返り、④周囲の人々との関係調整とした。修正後のプログラムについて、同じ対象者に対して、内容の適切性と有用性の視点での質問紙調査を行い、適切に洗練化されたかを確認した。その結果、プログラムの回数や介入時期、構成要素は適切であり、看護師が患者を支援するのに役立つという意見がみられた。

本研究を通じて作成した自己管理支援プログラムの内容は適切に洗練化され、臨床での有用性を持っている可能性が示された。今後は、実践の場でプログラムを活用する一般の看護師にとっても、より活用しやすい内容になるよう、病棟や外来の看護師からも意見も収集し、更に内容を検討する必要がある。その上で、外来で分子標的薬を内服する肺がん高齢患者を対象に本プログラムを適用し、プログラムの有効性を検証していくことが必要である。

論文審査結果の要旨

府川晃子さんは、外来で分子標的薬の内服による治療を受ける肺がん高齢患者の自己管理の課程を明らかにし、QOL を保つための自己管理を促進するプログラムを開発することを目的に研究を行った。

第一部の文献レビューを通じて、化学療法を受ける高齢がん患者の QOL の実態や、QOL に関連する要因について明らかにした。

第二部の研究目的は、外来で分子標的薬内服治療を受ける肺がん高齢患者の自己管理を促進するプログラムへの示唆を得るため、患者の自己管理の過程を明らかにするために、外来で経口分子標的薬による治療を受けている 65 歳以上 85 歳未満の肺がん高齢患者 17 名を対象に、半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析を行った。分析の結果、19 の概念が生成され、6 つのカテゴリーに類型化された。この結果から、看護師は、患者がより良い生き方について考え、生活の質を高める方法を探索できるように援助することや、患者と医療者の間で治療の目的が共有できるように支援する必要があることが示唆された。

第三部の研究目的は、「分子標的薬を内服する肺がん高齢患者の QOL を保つための自己管理支援プログラム」試案を作成し、専門性をもった看護師の意見をもとに洗練化して、プログラムを開発することとした。看護師がプログラムを効果的に実施するための手引きとして、看護実践ガイドも作成した。作成したプログラムを洗練化するために、肺がん高齢患者や外来で化学療法を受ける患者のケアに精通した看護師 11 名を対象にフォーカスグループインタビューを行い、プログラムの改善点を明らかにした。修正後のプログラムについて、同じ対象者に対して、内容の適切性と有用性の視点での質問紙調査を行い、適切に洗練化されたかを確認した。その結果、プログラムの回数や介入時期、構成要素は適切であり、看護師が患者を支援するのに役立つという意見がみられた。

以上より、本論文は本学大学院学則第 11 条第 2 項に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Health 9(13): 1801-1816,2017